

## 『玉水物語』と「封三娘」（『聊齋志異』）の比較 ——影響関係に関する有無の再検討を中心に——

穆雪梅

### はじめに

古代より日中では狐と人間の交流譚が多く伝えられてきた。狐は文学作品の主人公として登場し、大きな役割を果たしている。両国の文学で狐はよく女に変身し、人間界にやって来る。『玄中記』「狐五十歳。能變化為婦人。百歳為美女。」<sup>1</sup>や『和名類聚抄』「狐能為妖怪至百歳化為女者也」<sup>2</sup>等があり、狐は年を重ねると女に変身するものとされた。お伽草子には、『玉水物語』（別名「紅葉合」）という異類婚姻譚がある。この作品は狐が女に変身して男と契り、男に悪事を働く妖狐譚とは異なり、姫君に恋した狐は、男に変身するのではなく、女に変身し姫君に仕える優しい狐として描かれている。その点『玉水物語』は、異色ある作品として注目されてきた。成立時期に関しては室町末期～近世初期<sup>3</sup>と言われているが不明である。中国には怪異小説の粹と称される『聊齋志異』があり、その中に同じく狐が女に変身し、人間の女との愛を語る話「封三娘」もある。『玉水物語』と「封三娘」との影響関係はないとの主張<sup>4</sup>がある。先行研究を踏まえながら二作品を比較分析し、影響関係について再検討したい。

---

1李昉：『太平広記』四四七「説狐」（『玄中記』）九七八年，古新書局，中華民國六十五年 頁 945

2狩谷椽斎：『箋注倭名類聚抄』文政十年，頁 355，『元和活字那波道圓本』には「切韻云狐能為妖怪至百歳化為女也」とある。

3沢井耐三：「玉水物語」徳田和夫編『お伽草子辞典』，東京堂出版，二〇〇二年，頁 331

4安藤みな子：「御伽草子『玉水物語』考—『聊齋志異』封三娘との比較—」『愛知大学国文学』，愛知大学国文学研究会，二〇〇四年，頁 55

## 一、『玉水物語』・「封三娘」の梗概

日本における狐の変身譚は『日本霊異記』に、始祖起源としての「狐為妻命令生子縁」（上一二話）がある。その後『扶桑日記』三、『今昔物語』十四・五や浄瑠璃『信太妻』『神明鏡』、お伽草子の『木幡狐』等で狐が女主人公となる「狐女房譚」が多く知られる。中国でも『搜神記』の「陳羨」（阿紫伝説）、『広異記』の「上官翼」「李参軍」、『太平広記』の「任氏」、『宣室志』の「計真」等には宋の時代までの狐と男による怪異譚も多く見られるが、最も有名なのは「任氏」である。更に『聊齋志異』にも八十二編の狐の話のうち三十編以上は、狐が女に変身する男との異類婚姻譚である。

### 1 『玉水物語』

『玉水物語』の伝本は、京都大学附属図書館等所蔵の絵入写本、奈良絵本と京都大学附属図書館等所蔵の写本の二つの系統に分類されている。小論の研究対象とした伝本は、京都大学附属図書館蔵絵入写本二巻一冊（横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』八・角川書店・一九七三）である。『玉水物語』の梗概は次の通りである。

一匹の狐が花園で姫君を見初め、恋におちてしまった。狐は人間の男に化けて、自らの恋を成就させるのではなく、少女に化けて姫君に仕えることにした。狐は姫君の幸を見届けるまで、その側から離れることもなく、一途に姫君を慕い続け見守りを続けた。最後は姫君に自分の正体及び姫君を見守る気持ちを述べ、姫君の入内の日に姿を消した。

### 2 「封三娘」

「封三娘」の著者は蒲松齡（一六〇四～一七一五）である。「封三娘」（『聊齋志異』）の伝本は遼寧省図書館蔵の半部手稿本、山東人民出版社蔵の二十四卷抄本、北京大学図書館蔵の鑄雪齋抄本、山東省図書館等蔵の青柯亭刻本、『聊齋志異会校会注会評本』（中華書局）等多く存在する。小論の研究対象とした伝本は、遼寧省図書館蔵の半部手稿本である。なお張友鶴著『聊齋志異会校会注会本』（中華書局）を参考にする。「封三娘」の梗概は次の通りである。

ある正月十五日、范十一娘は盂蘭盆会に詣でた折、封三娘（狐）に声をかけられた。その後、封は范の所に通い、二人は

姉妹のようになった。范はいつも封の到来を強く望み、封を心から必要とした。封は范の幸を考え、自ら范に相応しい結婚相手の孟氏を見つけてあげた。范は別れを告げようとする封に対し、二人で孟氏の妻になろうと誘ったが封に断われた。ある日、范は孟氏と相談し封にお酒を飲ませ、孟氏に封を汚させた。封は范に自分は狐であり、范の美貌に惹かれたこと、色戒を破らなかつたら、第一天に上るところだったこと等の真相を打ち明け、二人の幸せを祈りながら姿を隠した。

## 二、先行研究

『玉水物語』の先行研究は、他の異類婚姻譚より少ない。小論で注目したのは下記である。

川村氏は「中世小説『玉水物語』の研究—狐の純愛物語として読む—」（一九九八）において、その文学的意義について次のように論じている。<sup>5</sup>

『玉水物語』は狐を扱った中世小説の中でも異彩を放った浪漫的情緒に溢れる純愛物語であると言えることができる。

川村氏が注目するのは、『玉水物語』に登場する雄狐の姫君に対する純情さである。雄狐が自分の恋心を打ち明けず、ひたすら姫君に奉仕するという純愛を描いた作品と理解する川村氏の考えは妥当と思われる。

また、安藤氏は、「御伽草子『玉水物語』考—『聊齋志異』封三娘との比較—」（二〇〇四）において、「封三娘」の作品としての性質及び成立、影響関係について次のように論じている。<sup>6</sup>

『聊齋志異』第一七七話「封三娘」は狐が人間に化ける話である。『玉水物語』のような恋愛物語ではないが、収められている他の狐の話と違っていくつかの共通点が見られる。（略）「封三娘」は人間の女と雌狐の友情を描いた少し特殊な物語である。

---

5川村絵美氏：「中世小説『玉水物語』の研究—狐の純愛物語として読む—」『古典文学研究』六号、長崎大学古典文学研究会、一九九八年、頁53  
6注4に同じ、頁46, 48, 55

『玉水物語』の成立時期ははっきりしておらず、中世から近世初期の間と幅広く見られている。「封三娘」との共通点がいくつか見られたため『聊齋志異』の影響も考えたが、こちらの成立は清初期で『玉水物語』と同じかそれ以後であり、仮に以前であったとしても当時は中国流行が日本に渡るまでに長い時間を要したため、影響関係はないと考えられる。

安藤氏は、『玉水物語』は恋愛物語、「封三娘」は友情物語であるとして二作品を比較し、影響関係がないと主張している。筆者はその主張の妥当性を再検討したい。

### 三、『玉水物語』 「封三娘」に登場する狐は雄か雌か

『玉水物語』は、雄狐が愛する姫君の傍にいたいため、姫君にふりかかる不幸を避けようとして、自己抑制し、人間の男に変身するのではなく、女に化け姫君に奉仕するひたむきな愛を語る雄狐と人間の女との純愛物語であると川村氏、沢井氏、安藤氏等によって指摘されてきた<sup>7</sup>。しかし作品の本文においては、狐の描写に関する部分は、次の「1」の通りである。（『玉水物語』の引用文は『室町時代物語大成』八により、下線部は筆者による。以下同様。）

#### 1 『玉水物語』

此あたりには、きつねと申もの、おほくすみける、ところなり、おりふし、此はなそのに、きつねひとり侍りしか、姫君を見奉りあな美しの御姿や、せめて時ゝも、かゝる御在様を、よそにても、見奉らはやと思て、

姫君、かえらせ給ひければ、きつねも、かくて在へきことならずと、おもひて、我つかえそかへりける

此玉水、夜更て、うちまきれいて、もとの姿に成、とは殿の、南おもてのつかに、あにおとゝなど有所へ、ゆきたりければ我ゆへ、かやうにはけたりしを、つゝに色にも出さて過しことの、ちくるいなから、むさんさよ、

<sup>7</sup>注3, 注4, 注5に同じ

即ち、「きつねと申もの、」「きつねひとり」「きつねも」「もとの姿になり」「ちくるいなから」であり、「男狐」や「雄狐」の表現は見当たらない。それではなぜ、先行研究では登場する狐が雄だと判断されたのか。「我、此きみにあひ奉らは、かならず御身、従に成給ひぬへし、（略）世にたくひなき、御あり様成を、いたつらになし奉らんこと、御いたはしく」、「我、ちくるひとひなから、ちかつきまいりて、ちきり奉らんことは、いたはしきに、たゞ、かくなから、見奉り、そひたてまつるに、心をなくさめつる事の、はかなさよ」とあるので、もし狐の本性である雄狐のまま人間の男になって契つてしまえば愛する姫君の命を奪うことになることを恐れて、女になったと文脈上理解できるからであろう。筆者もこの解釈が妥当だと考える。一方、「封三娘」に登場する狐に関しては、次の「2」の通りに描かれている。（「封三娘」の引用文は半部手稿本（影印本）により、下線部は筆者による。）

## 2 「封三娘」

三娘曰妹子害我矣倘色戒不破道成當升第一天今隨奸謀命耳乃起告辭十一娘告以誠意而哀謝之封曰實相告我乃狐也緣瞻麗容忽生愛慕如繭自纏遂有今日此乃情魔之劫非關人力再畱則魔更生無底止矣

半部手稿本(影印本)  
康熙四十六年前  
遼寧省図書館蔵

二十四卷抄本  
乾隆十五～三十一年  
山東人民出版社蔵

鈔雪齋抄本  
乾隆十六年  
北京大學図書館蔵

青柯亭刻本  
乾隆三十一年  
山東省図書館等蔵

「2」の文は「封三娘」末尾の、封三娘が十一娘に正体を打ち明け、別れを告げる場面である。ここで初めて封三娘は狐であるという説明で、女に変身した狐のことを「雌狐」ではなく、単に「狐」と表記している。他の伝本で比較してみても、「狐」である。即ち「封三娘」でも「狐」としかなくて、雌か雄か性別は不明である。安藤氏は『玉水物語』は雄狐と人間の女との恋愛物語、一方「封三娘」は雌狐と人間の女との友情の物語だと指摘<sup>8</sup>している。筆者は、「封三娘」に登場する狐は女に変身した故「雌狐」だと理解することは妥当なのか、「封三娘」を狐と人間との友情の物語と解釈することは妥当なのか疑問に思う。これらの疑問を解くために、『聊齋志異』の狐に関する作品を調べたところ、約五百編ある作品の中で、狐に関する作品は、人間の女に変身する四十五編（人間の男〔但し「封三娘」のみ女〕との恋愛三十九編、人間を助けるもの四編、人間をからかうもの二編）、人間の男に変身するもの十九編（人間の男との友情十五編、男に復讐二編、男をからかうもの一編、女を暴行するもの一編）、狐を退治する作品九編、その他九編、四種類の計八十二編がある。また作品中に「きつね」がいかなる表記をされているか。特に「雄狐」「雌狐」という表記があるのかどうか。その結果を表2に纏めた。

表1 『聊齋志異』における狐に関する作品の分類表は筆者作成

	女に変身	男に変身	狐を退治する	その他	総作品数
恋愛譚	39	0			39
人間をからかう	2	1			3
人間を助ける	4	0			4
女との友情	0	0			0
男との友情	0	15			15
男に復讐	0	2			2
女に暴行する	0	1			1
作品数	45	19	9	9	82

8注4に同じ, 頁48

表2 『聊齋志異』における「きつね」という語の表記  
は筆者作成

表記	女に変身	男に変身	狐を退治する	その他	作品数
狐	39	15	9	8	71
狐仙	5	2	0	0	7
老狐	1	0	0	0	1
白狐	0	1	0	0	1
小狐	1	1	0	0	2
狐兄	0	0	1	0	1
狐狸	0	1	0	0	1
黒狐	1	0	0	0	1
<b>雄狐</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>
<b>雌狐</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>

注：一作品中に複数の場合がある。

表2の如く、「きつね」は「狐」「狐仙」「老狐」「白狐」「小狐」「狐狸」「狐兄」「黒狐」と表記されている。性別が明確に表記されているのは「狐兄」のみである。「狐」と表記されている作品は最も多く七十一もあるが、その中で其々女、男に変身する作品は「雌狐」「雄狐」と表記されず、すべて「狐」である点が注目される。「狐」という表記だけで、登場する狐が雄か雌か判断するのは不可能だと思われる。表記のみならず、内容と合わせて判別することが不可欠であろう。その上で「封三娘」は友情物語か恋愛物語か。次に考察したい。

#### 四、「封三娘」は友情の物語か、恋愛の物語か

確かに「封三娘」は、女同士の友情を謳歌する作品だと指摘<sup>9</sup>されているように、狐が人間の女に変身して、十一娘と姉妹関係のようになり、共に暮らしたり、十一娘の幸せを考え、彼女に相応しい結婚相手を探し、結婚できるようにさせたりと、女同士の友情の描写がある。だが内容全体を通して、友情の他に、恋愛物語の要素も読み取れる。

9馬瑞芳：「奇特迷人的狐封三娘—『聊齋』人物談」『文史知識』八号，中華書局，一九九五年，頁107

本文では、

- (1) 十一娘將歸封凝眸欲涕十一娘亦惘然遂激過從
- (2) 日望其來悵然遂病
- (3) 十一娘因述源封泣下如雨因曰妾來當須祕密造言生事者飛短流長所不堪受十一娘諾偕歸同櫛快與傾懷病尋愈
- (4) 封堅辭去(略)十一娘知不可留使兩婢女踰垣送之行半里許辭謝自去婢返十一娘伏牀悲惋如失伉儷
- (5) 我姑姑盼欲死封曰我亦思妹但不樂家人知歸啓園門我自至婢歸告十一娘十一娘喜從其言則封已在園中矣相見各道間濶綿綿不寐視婢子眠熟之起移與十一娘同枕
- (6) 三娘曰妹子害我矣倘色戒不破道成當升第一天今墮奸謀命耳乃起告亂十一娘告以誠意而哀謝之封曰相告我乃狐也緣瞻麗容忽生愛慕如繭自纏遂有今日此乃情魔之劫非關人力再留則魔更生無底止矣

と描かれている。場面(1)～(5)は封三娘と十一娘との別れ、再会の場面である。別れる時互いに悲しみながらの別れで、それに十一娘が封三娘との再会を待ち続けて病になったり、再会の喜びで病が治ったりして、再会後に寝る時間も惜しむほど語り続ける。これらの描写は、恋人同士の別れのように描かれている。「傾想殊切」「驚喜」「日望其來悵然遂病」「十一娘伏牀悲惋如失伉儷」とあるように、十一娘が封三娘にずっと側にいて欲しいと強く望んで心から封三娘を必要としているところは、恋人、夫婦のように感じられる。十一娘にとって封三娘の存在は不可欠であろう。この感情は友情の域を超えている。もし封三娘が男であれば十一娘と夫婦になるに違いないと推測できる。実は『聊齋志異』の中に、狐と人間の恋愛譚において、狐に変身した女と別れた後、人間の男が病気になったという描写も稀ではない。別れの悲しみ、再会の喜びを描くことは中国の怪異小説でも、日本の異類婚姻譚でも、重要な要素の一つであろう。

場面(6)は、封三娘が十一娘に正体を打ち明け、別れを告げる場面である。封三娘は十一娘の美貌に惹かれ、接することにした。但し封三娘にとってしてはいけないことがあり、それは「色戒」であった。



これは、なぜ封三娘が女に変身したかという疑問の答えと言える点である。言うまでもなく男に変身となると、男女の間では交際することが一般的で避け難いことである。そうすると「色戒」を破ることになる。封三娘は男女の関係を避けたいため、そして十一娘と接することも続けたいため、やむを得ず女に変身したと理解できよう。これは「玉水物語」の主人公である狐の取った行動と同様である。確かに本文では「雄」や「雌」と書かれておらず、雌狐であるという解釈もできなくはない。だが『聊齋志異』には、人間の男に変身する作品十九編のうち、狐と人間の男との友情を語る作品は十五作品もあるが、人間の女に変身する作品四十五編のうち、女に変身した狐と人間の女との友情を語る作品は一編もない。故に「封三娘」は単純な友情の作品とは言い難く、むしろ「玉水物語」と同様に、一種の恋愛物語と見なすべきだと思われる。「封三娘」は、女の精神的同性愛の作品としての独自性を作り出したという指摘<sup>10</sup>もあるが、物語は如何に読むか、古橋氏が「物語は多様な読みが可能である。むしろ物語は多様な読みを許容しているといったほうがいい。それは物語が最初から多重なものだからだ。」<sup>11</sup>と論じているように、結局「封三娘」は、雄狐が十一娘の美貌に憧れ一緒に過ごすことを望むが、男になって契りを交わし「色戒」を破ることは出来ない故、止むを得ず女の姿となって十一娘に近づき純愛を貫いた話と見るべきであろう。

## 五、『玉水物語』と「封三娘」の共通点・相違点

上述の如く『玉水物語』「封三娘」は、雄狐が人間の女の姿になって恋する人間の女に近づくことで純愛を貫いた雄狐と人間の女との恋愛物語として理解できる点において共通する。共通点、相違点は以下の通りである。

### 1 共通点

(1) 雄狐（玉水、封三娘）が人間の女に変身し、その側にいるこ

10胡淳艶：「閨中知己，却是同性愛恋—解讀『聊齋志異・封三娘』」四号，鳳凰出版社，二〇〇四年，頁31

11古橋信孝：「物語の読み—『木幡狐』の場合—」黒田日出男 佐藤正英 古橋信孝 編『御伽草子 物語 思想 絵画』，ペリかん社，一九九〇年，頁28

と。そして女（姫君、十一娘）に必要とされていること。

(2) 其々姫君（五色の紅葉を探してあげたため、入内することになった。）、十一娘に相応しい結婚相手を見つけてあげたこと。

(3) 雄狐（玉水、封三娘）が女の幸せを見届けた後、別れを告げること。

(4) 雄狐（玉水、封三娘）が正体を打ち明け、去って行ったこと。

(5) 雄狐（玉水、封三娘）が人間と交情を交わすことができないこと。

## 2 相違点

(1) 玉水は三年間の間ずっと姫君の側に居続けたのに対し、封三娘は十一娘のところに断続的に通ってくること。

(2) 雄狐（玉水、封三娘）が人間と交情を交わすことが出来ない理由。

二作品の共通点を見ると話の構成及び展開が類似していることが窺える。

まず、其々人間の女の美貌に惹かれ、その側にいたいため雄狐が女に変身した。その結果女に深く信頼され、（『玉水物語』）「すこしも、よき様ならば、早く帰給ふへし、こなたの、つれ～、思ひやり給へ、かきくらす心ちなんすと、かゝせ給ひて」「此人の御覚へほどの、御うらやましきよなど、かたはらには、そねむ人も有へし」等、（「封三娘」）「傾想殊切」「驚喜」「日望其來悵然遂病」「十一娘伏牀悲惋如失伉儷」「封欲辭去十一娘泣畱」とあるように、ずっと側に居て欲しいと心から必要とされた。

次に、玉水、封三娘は其々姫君、十一娘に相応しい結婚相手を見つけてあげた。但し『玉水物語』は間接的、「封三娘」は直接的である。

それから、二作品とも末尾で狐は人間の女に正体を打ち明けた。玉水は姫君と一緒に入内のことを悩んだ末、姫君との別れを決心し、狐であること、姫君に恋したことを書き残し姿を消した。同じく封三娘も、十一娘の元から姿を隠す時にも、狐であり、范の美貌に惹かれたことを告げて去って行った。

最後に、（『玉水物語』）「我、此きみにあひ奉らは、かならず御身、従に成給ひぬへし、（略）世にたくひなき、御あり様成を、いた

つらになし奉らんこと、御いたはしく」、「我、ちくるひといひなから、ちかつきまいりて、ちきり奉らんことは、いたはしさに、たゞ、かくなから、見奉り、そひたてまつるに、心をなくさめつる事の、はかなさよ」（「封三娘」）「三娘曰妹子害我矣倘色戒不破道成當升第一天」とあるように、もし玉水が人間と契りを交わすと、人間の命が尽きるという「人獣交会のタブー」が示される。一方、封三娘が人間と契りを交わすと、第一天に上昇できなくなる。要するに、玉水も封三娘も禁忌を犯すことは許されないのだ。玉水は相手の女の命が亡くなる恐れ、「封三娘」は自分が昇天出来なくなる恐れで趣旨は異なるが、二作品に登場する雄狐が男に変身するのではなく、女に変身した直接的な原因が示されている。

また、二作品の相違点は、（１）玉水は姫君に付き添い「姫君の御あそひ、御側に、朝夕なれつかふまつり、御てうつ参らせ、つきさへと同じく、御きぬの下にふし、たちさることなく、侍ける」三年間も離れたことがなかった。封三娘は、「十一娘將歸封凝眸欲涕」「封堅辭去」「封欲辭去十一娘泣雷」「乃起告辭」通ってくるだけで、ずっと一緒に居ようとしめない。所謂異類と人間との「通い婚」の要素であろう。『聊齋志異』の中で三十九編ある狐と人間との恋愛譚では、「通い婚」の例が多く見られる。本来なら、日本文学で、異類と人間による「通い婚」の形を取るのが一般的であるが、『玉水物語』は例外の一つである。

（２）『玉水物語』では、「人獣交会のタブー」という罪を犯した者への罰として、姫君が「いたすら」（死）になる。これは日本の異類婚姻譚の特徴の一つで、人間と異類どちらかの命がかかっている忌み嫌われる行為についての仏教の思想と思われる。「封三娘」では、狐は人間と交情を交わしても命にかかわることがない。封三娘にとって「色戒」を破ることによって、至高無上の天道に上昇することができなくなった。同じく天罰を受けるが、日本では死という大罰を受けなければならない。中国では日々の修行に努める修行者として、利益の靈験がなくなってしまう。日中の怪異譚の違いによるものと言えよう。

## 六、『玉水物語』と「封三娘」(『聊齋志異』)の影響関係について

『玉水物語』の成立時期が不明であることは周知の通りである。安藤氏は、『玉水物語』の成立、影響関係について「当時は中国流行が日本に渡るまでに長い時間を要したため、影響関係はないと考えられる。」<sup>12</sup>と主張している。確かに当時は一夜で流行となることがありえない。しかし『聊齋志異』の日本伝来について、

天明四年(一七八四年)出版の『画引小説字彙』援引書目をみると『志異』が名をつらねている。(略)最近長崎の商舶載来書目の調査によって、明和五年(一七六八年)と寛政十二年(一八〇〇年)及び嘉永七年(一八五四年)に『志異』の版本が舶載されていることがわかった。明和五年と言えば、この小説の初めての刊本であり青柯亭本が出版された翌々年にあたる。したがって、この小説は、大陸で出版されてまだいくらか年月を経ないうちにわが国にもたらされたわけである。<sup>13</sup>

と藤田氏が論じている。『聊齋志異』の最古の伝本は、蒲松齡が六十七歳になる(一七〇七)前に書いた最後の修正稿だと言われている半部手稿本(遼寧省図書館蔵)である。この本はすぐに他の版本の祖として、人から人へと貸し回し写され、「人竟伝写、遠迹借求」程の人気作となった。乾隆三十一年(一七六六)に、初めて刊行された青柯亭本(萊陽人趙杲刻)も、この半部手稿本を元にして作られたという。よって明和五年(一七六八)『聊齋志異』の版本が舶載される前までに、日本で『玉水物語』がまだ成立していなかったら、その影響関係もあり得ることになろう。しかし『玉水物語』の成立下限も不明で、『聊齋志異』が成立後まもなく長崎から日本国内へ招来されても、『玉水物語』に影響を与えたか否かは不明である。いずれにしても両者の共通性は作品の構成論から注目されよう。

また「封三娘」の題材となる資料が存在すれば、『玉水物語』と「封三娘」の直接の影響がないまでも、間接の影響がある可能性もあ

12注4に同じ、頁55

13 藤田祐賢：「中国小説と日本常設—『聊齋志異』の影響—」『高校通信東書国語』、東京書籍、一九七五年、頁8

ろう。しかし現存資料には、「封三娘」との構成的に類似した作品が存在せず、『聊齋志異』の百編余りの作品が題材とした『搜神記』『虞初新志』『幽明録』『広異記』等<sup>14</sup>に、「封三娘」の題材は見当たらない。

### おわりに

先行研究では、安藤氏は『玉水物語』は恋愛物語、「封三娘」は女と雌狐の友情物語とし、二作品の共通点、相違点を比較し、影響関係がない<sup>15</sup>と論じてきた。しかし筆者は、雄狐が人間の女に恋したが、「人獣交会のタブー」によって、愛する女の命を奪わないため（第一天に昇ることを目指し色戒を破らないため）人間の男の姿になることは諦め、人間の女の姿となって近づき、愛する女性の近くで過ごすことで満足し純愛を貫いた恋愛譚として共通性を持つことを指摘したい。

両者の直接の影響関係の有無を証明することは困難であるが、『玉水物語』と「封三娘」が、登場人物の振る舞いや、物語の構成・展開において酷似していることは否定できないと考える。

### 主要参考文献

- 徳田和夫 『お伽草子辞典』 東京堂 二〇〇二年  
市古貞次 『中世小説の研究』 東京大学 一九五五年  
鈴木友子 「中京大学図書館蔵『玉水物語』解題・翻刻」 『中京大学図書館学紀要』 中京大学付属図書館 一九八〇年  
沢井耐三 「狐と狸—中世の相貌の一面『玉水物語』『筆結の物語』考」 『説話論集』八 清文堂 一九九八年  
横山重・松本隆信編 『室町時代物語大成』八 角川書店 一九七三年  
蒲松齡作 増田渉 松枝茂夫 常石茂訳 『聊齋志異 中国古典文学大系』四〇 平凡社 一九七一年  
奈良絵本国際研究所 『御伽草子の世界』 三省堂 一九八二年  
穆雪梅 「狐の変身前・人間との離別後における住処（異郷）の日中比較—お伽草子『木幡狐』と『聊齋志異』を中心に—」 『国語と教育』四十一 長崎大学教育学部 二〇一六年  
朱一玄 耿廉楓 盛偉 『聊齋志異辞典』 天津古籍出版社 一九九一年  
馬瑞芳 「狐鬼と人間解奇書『聊齋志異』」 当代中国出版社 二〇〇七年  
康笑菲（著）姚政志（訳） 『説狐』 浙江大学出版社 二〇一一年

14注9に同じ、頁182

15注4に同じ、頁55